

EBM を冠した国内臨床医学図書の分析

諏訪部直子
杏林大学医学図書館

Evidence Based Medicine (以下 EBM) とは、医学文献をそのエビデンスのレベルによって格付けした上で、入手しうる最高のエビデンスに基づいて診療を行うものである。EBM という言葉は出版物の中では 1991 年 ACP Journal Club のエディトリアルに初めて登場した¹⁾。本格的な文献としては 1992 年に Evidence-based Medicine Working Group が JAMA 誌上で EBM を紹介したものが最初である²⁾。

日本の医学界では欧米から数年遅れてブームが始まり、1990 年代後半から EBM を冠した医学書が次々と出版されてきた。それは一種の流行ともいえる現象となって今日まで続いている。これらの医学書は、果たして「エビデンス」とされるものに基づいて書かれているのであろうか。

このような疑問を持ったのは、EBM が紹介された初期のころは、文献情報でありさえすればそれはエビデンスであるという誤った認識が一部に見られたためである。

筆者は二つの理由から、日本にはエビデンスの観点から原著論文を吟味し、臨床に応用するという EBM の手法がまだ根付いていないのではないかと考えている。ひとつはエビデンスレベルが高いと言われる RCT やメタアナリシスの研究が日本では少ないということである。そのため、日本人に適したエビデンスを日本語で得ることがほとんどできない状態である。もうひとつは、雑誌の特集記事という便利なシステムが確立していることである。これを定期的に読んでいれば、内外の比較的新しい知見を短時間に網羅することができるため、あえて外国語の原著論文を、エビデンスレベルを吟味してまで読もうとするのは少数派である。

このような状況の中で発行された EBM を冠した日本の臨床医学書が、本当に EBM の正しい理解のもとに執筆・編集されているのだろうかという疑問を検証すべく、それらの図書を分析することを試みる。

参考文献

- 1) Guyatt GH. Evidence-based medicine. ACP Journal Club. 1991; Mar-April: A-16.
- 2) Evidence-Based Medicine Working Group. Evidence-based medicine: A new approach to teaching the practice of medicine. JAMA. 1992; 268: 2420-5.